三重県埋蔵文化財調査報告 53

津市高茶屋

大垣内遺跡発掘調査報告

1982・3

三重県教育委員会

目　　次

Ⅰ．発掘調査の経緯…… 1

Ⅱ．位置と地形…… 2

Ⅲ．遺　　構…… 4

　１、古墳時代後期の遺構…… 4

　２、平安時代前期の遺構…… 6

Ⅳ．遺　　物…… 7

　１、古墳時代前期の土器…… 7

　２、古墳時代後期の土器…… 7

　３、平安時代前期の土器…… 11

　４、その他の遺物…… 11

Ⅴ．結　　語…… 12

図目次

第１図　大垣内遺跡位置図（１：50000）

第２図　大垣内遺跡周辺地形図（１：5000）

第３図　発掘区遺構実測図(１：200)

第４図　竪穴住居址遺構図(１：100)

第５図　遺物実測図（１：４）

図版目次

ＰＬ１　大垣内遺跡周辺航空写真

　　大垣内遺跡遠景

ＰＬ２　竪穴住居址（ＳＢ１・２）

ＰＬ３　掘立柱建物址と竪穴住居址

　　出土遺物

ＰＬ４　出土遺物

例　　言

1．本書は県立高茶屋病院の合併処理槽建設に伴い、県保健衛生部からの依頼により、三重県教育委員会がおこなった津市高茶屋大垣内遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。

2．調査は次の体制でおこない、その経費は県立病院課が負担した。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　伊藤克幸（三重県教育委員会文化課）

　　吉村利男（　　〃　　）

調査協力　　萱室康光（津市教育委員会社会教育課）

なお、出土品の整理・実測は伊藤、吉村があたり、一部奈良大学生田中久生君の協力を得た。

報告書の作成は、Ⅰ伊藤、Ⅱ萱室、Ⅲ～Ⅳ吉村が分担しておこなった。

3．調査には、県立病院課、県立高茶屋病院並びに津市教育委員会には種々配慮いただき、また現地の作業には久居市新家町地区の方々の協力を得た。

4. スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

大垣内遺跡発掘調査報告

Ⅰ．発掘調査の経緯

昭和55年７月10日、県立高茶屋病院施設管理課と合併処理槽建設予定地内に所在する大垣内遺跡の取り扱いについて協議したところ建設が急がれているとのことから、現地分布調査を実施し、建設計画変更などの具体的な方策をたてることになった。

昭和55年７月14日、建設予定地内に所在する大垣内遺跡について現地分布調査を実施したところ、地表面に多数の古墳時代以降の遺物が散布しており、道路崖面には、遺物包含層が確認された。遺跡の範囲は、台地縁辺部を中心に約10,000㎡であると推定され、建設予定地をどこに変更しても遺跡の一部が消滅することが判明した。このことから、遺構の有無を確認するため分布調査の一環として試掘調査を実施することになった。

昭和55年７月16日、建設予定地約500㎡内に４ｍ×４ｍのグリッドを４ヶ所設定して試掘調査を実施したところ、柱穴、土坑などの遺構が検出され、土師器高杯、台付甕、甕、土錘、須恵器などの遺物片が出土した。この結果、合併処理槽本体建設地約450㎡については、本調査が必要であると判断し、県立病院課に対し、文化財保護法第57条の３の規定による文化庁長官への通知書を提出するよう依頼するとともに、調査期間、面積、経費などについての見積り書を提出した。

昭和55年７月26日、県立病院課より提出された土木工事等のための発掘通知書を受理し、８月４日付けで文化庁長官あて進達した。

昭和55年８月１日、県立病院課より本調査についての文書依頼を受け、調査について協議したところ、現地調査期間は、８月18日より15日間程を予定し、調査面積は約450㎡、調査経費は、県立病院課の負担とし、調査主体は、県教育委員会として文化課職員が担当者となって実施することになった。

昭和55年８月16日、県教育長名で文化財保護法第98条の２の規定による埋蔵文化財発掘通知書を文化庁長官あて提出した。

昭和55年８月18日、現地の発掘調査を開始。

昭和55年９月２日、現地の発掘調査を終了。

９月３日現地を引き渡した。この調査により、高茶屋地区には、現在のところこの遺跡１箇所しか判明していないこともあり、当地の古代史と文化を解明するうえで貴重な資料を得た。

その後、病院内の合併処理槽への配管、桝などの設置については、工事工程にあわせてその都度工事立会を実施し、遺跡の保護に努めた。

II、位 置 と 地 形

津の南郊に広がる高茶屋台地は南の雲出川、北の半田丘陵に挟まれた標高20m前後の第3紀洪積台地である。台地の北側には相川がほぼ中央には天神川が流れ、大きくはないがそれでもかなり深い溪谷を形成している。今回発掘調査した高茶屋大垣内遺跡（地図番号1）は、天神川によってできた小溪谷を見下ろす台地上にある。行政的には、津市高茶屋小森町字大垣内に属する。

高茶屋遺跡の大部分は、すでに高茶屋病院建設時に破壊されているが、それでも付近の畑からは古墳時代を中心とした遺物が出土していた。また、かってこの地で縄文時代中期に属する土器片も採収されており、古くから人々の生活の場となっていたと思われる。

それを証明するかのように、近年相川左岸の垂水A遺跡より縄文式土器が多数発見され、縄文時代の集落址の可能性が持たれている。

高茶屋台地の大部分は開発が進み、多くの工場・民家が建ち並んでいるが、それでも残った畑には土器の散布が見られる。西里ノ上遺跡・四ツ野A・B遺跡・本宮遺跡・大口遺跡などがそれで、いずれも弥生時代から古墳時代にかけての遺跡と思われる。

一方、雲出川左岸の自然堤防上にも多くの遺跡がある。古くにその一部が調査された赤坂遺跡・近年

第1図　大垣内遺跡位置図（1：50000）（国土地理院1：25000　「津西部」「津東部」「大仰」「松阪港」）

1大垣内遺跡　2垂水A遺跡　3本宮遺跡　4西里ノ上遺跡　5四ッ野A遺跡　6四ッ野B遺跡
7雲出島貫遺跡　8上木造遺跡　9下木造遺跡　10奥の谷遺跡　11大口遺跡　12新家A遺跡
13長持元屋敷遺跡　14新家B遺跡　15桃園小学校西遺跡　16赤坂遺跡　17池ノ谷古墳　18稲荷塚古墳
19新家北方古墳群　20行成古墳　21牧古墳群　22木造里中古墳　23大塚山古墳　24垂水城址
25小森上野城址　26小森城址　27木造城址　28久居古窯址

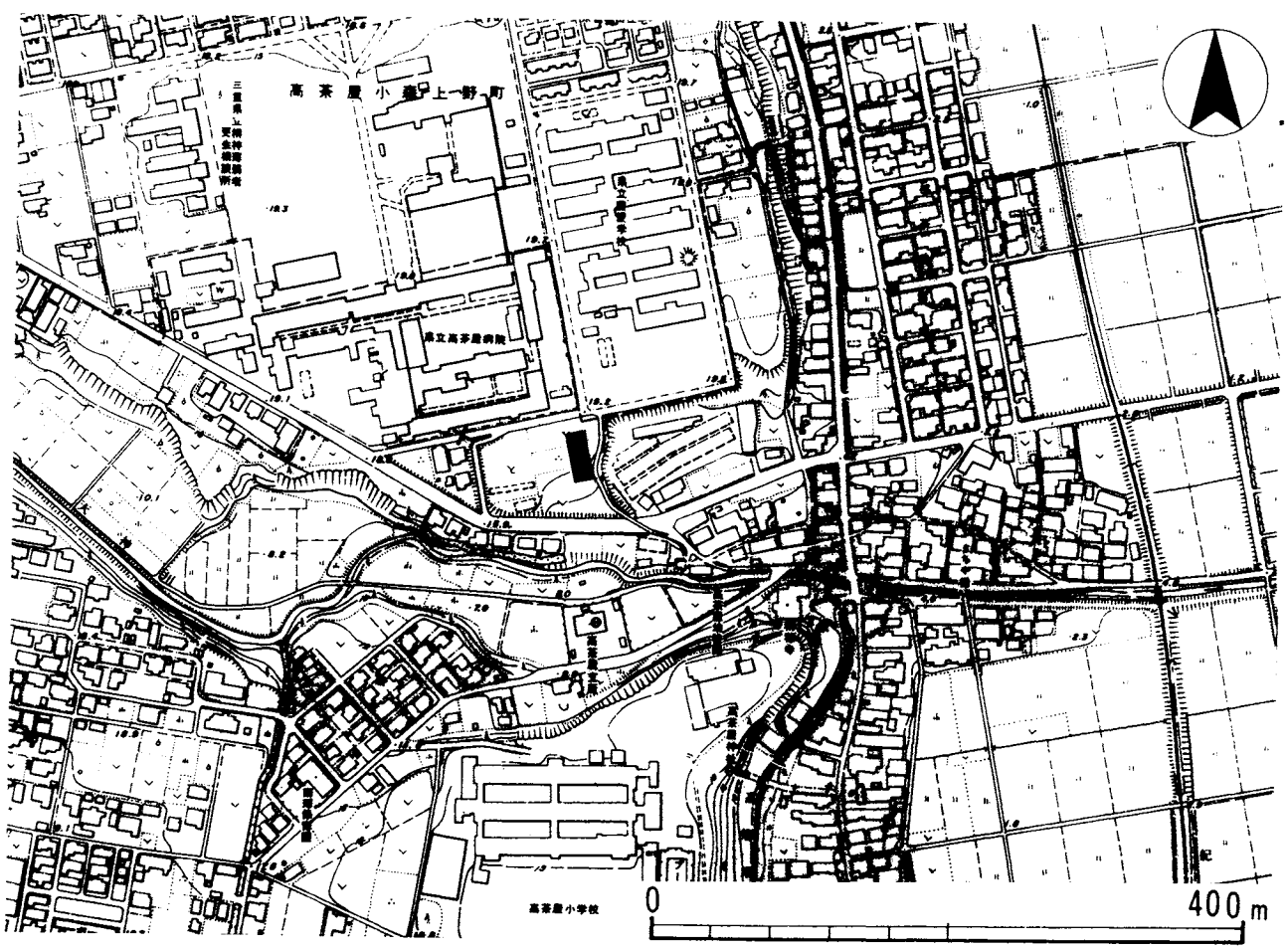
発掘調査された長持元屋敷遺跡・弥生時代から中世までの土器片の散布する雲出島貫遺跡などがそれである。特に雲出島貫遺跡は『正倉院文書』の「天平勝宝九歳四月七日西南角領解」と類推されている文書の「伊勢国壱志郡嶋抜郷」にあたり、古くからこの地方の中心的集落であったことが伺われる。

一方、これらの人々を葬ったと思われる古墳について見ると、垂水に中勢地区最大の前方後円墳池の谷古墳（全長80ｍ）がある。丘陵頂部に独立して築かれたもので周囲から円筒埴輪も発見されている。他には、稲荷塚古墳・新家北方古墳群・行成古墳・牧古墳群など中小の円墳が知られているが詳細は不明である。

中世に入ってもこの地は重要な位置を占める。特に南北朝期には中伊勢の工藤氏と南伊勢の北畠氏との勢力が頡頏する所で、多くの中世城館が築かれている。垂水城址・小森上野城址・小森城址・木造城址などがそれで、これらを舞台にいく度かの合戦が起きている。伊勢国司北畠満雅が戦死した岩田川の戦（永享元年）・鷺山の合戦（天文年間）などが歴史に名を留めている。

また、近世には参宮街道が通り、お伊勢参りの人々でにぎわったといわれる。

このように古代から重要な位置を占める高茶屋地区もこれまで考古学的な調査は、ほとんど実施されておらず、今回の調査を機会に今後の研究の待たれる所である。



第２図　大垣内遺跡周辺地形図（１：5000）　■ 発掘調査区　× 工事立会土器出土地

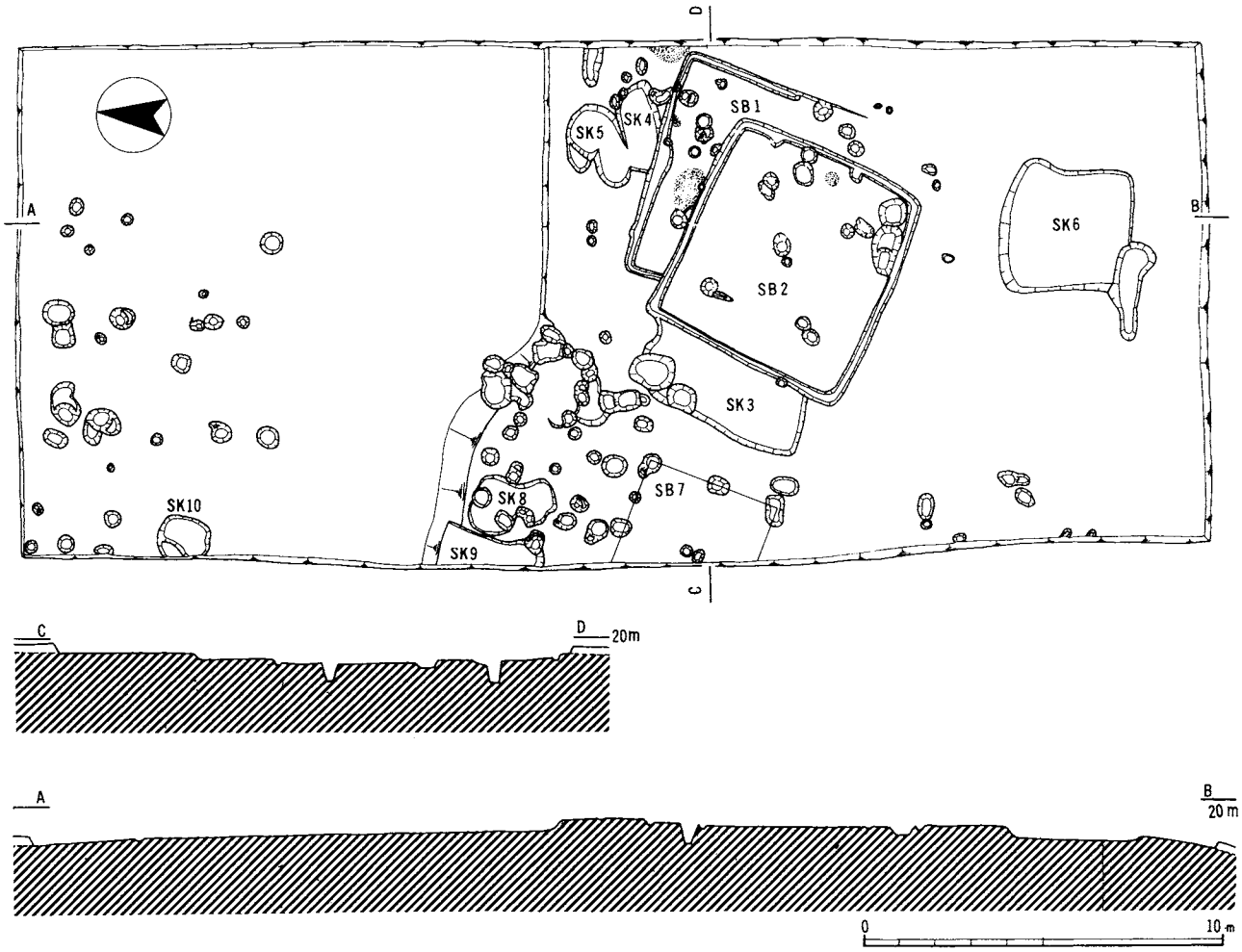
Ⅲ. 遺　　構

発掘調査は合併処理槽建設予定地の東西14ｍ、南北33ｍのわずか面積462㎡についてのみ実施したものであり、そのうえ発掘区北半部約162㎡はすでに30㎝前後削平されていたため、検出された遺構はきわめて少ない。まとまった遺構としては古墳時代後期の竪穴住居址２、土坑３及び平安時代前期の掘立柱建物址１、土坑４があげられるが、またこれらの遺構の周辺には、２時期のいずれかに属するピット群が発見された。なお（　）内の算用数字は第５図の遺物番号である。

１、古墳時代後期の遺構

竪穴住居址ＳＢ１・２と土坑ＳＫ４・５・10がある。

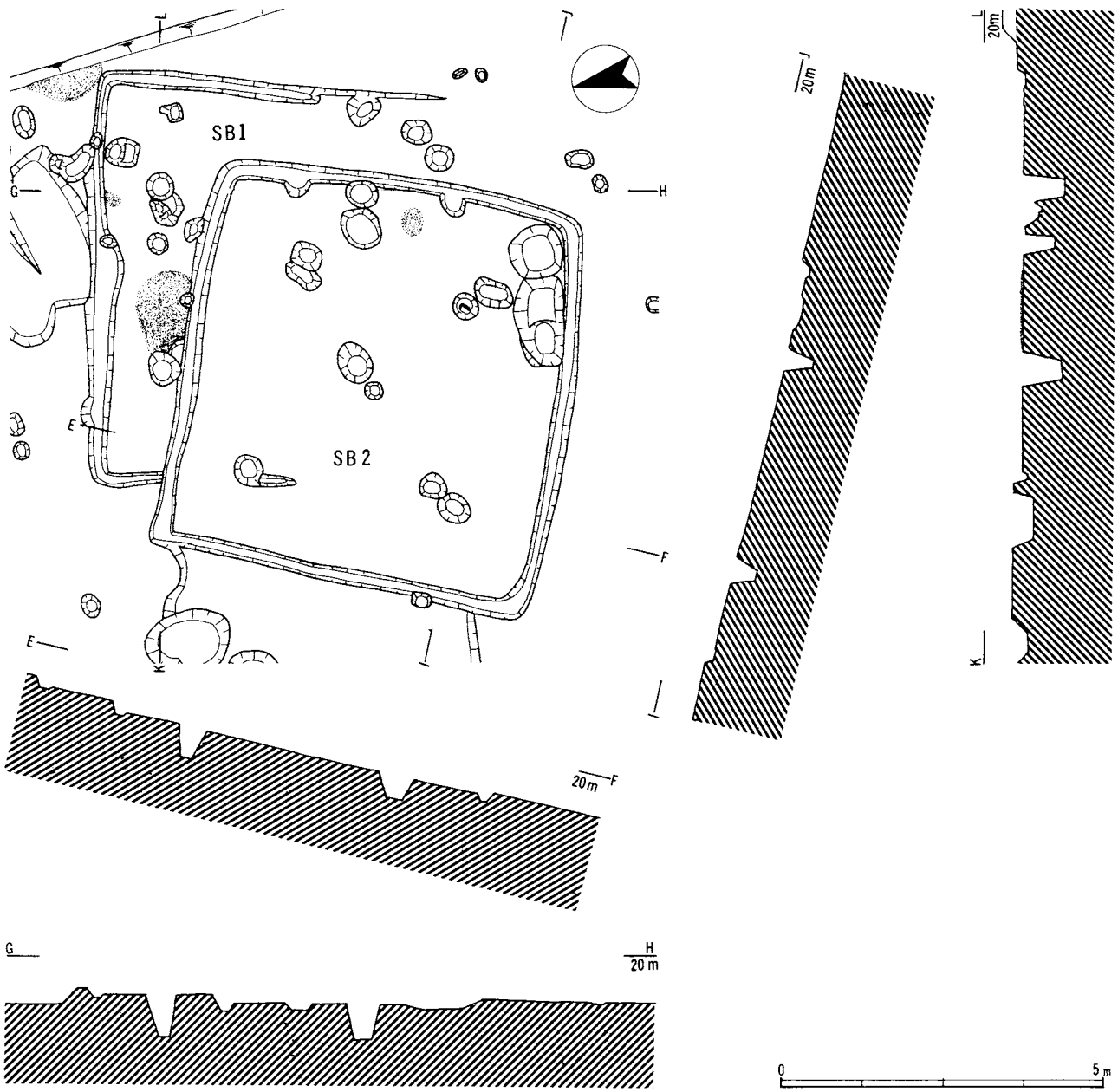
ＳＢ１　発掘区の中央部東寄りにＳＢ２と重複して検出された方形の竪穴住居址で、南北軸がＮ12°Ｅを示す。規模は東西には北壁部掘り方が長さ6.2ｍで、南北には東壁部で長さ5.3ｍまで確認できるもの。住居址南西部分がＳＢ２によって切られていることや南東隅の流失のため掘り方が検出できず、南北方向の長さは不明である。床面は、北壁部地山面から約12㎝の深さで掘られ、幅20～30㎝、深さ約５㎝の周溝が認められる。径40～60㎝、深さ60～67㎝の４隅の主柱穴の位置は、東西側では周溝から約1.5



第３図　発掘区遺構実測図（１：200）

m離れているのに比べ、北側では周溝から0.8mと壁面に寄っているのが特徴的であり、そのため柱間間隔は東西2.8m南北3.1mとなる。焼土はいずれも薄く、北壁寄りに2箇所認められ、1箇所は周溝近くにあるが、わずかでカマド址と断定できるものではない。またもう1箇所は北西隅の柱穴近くにあり、床面中央に寄っているが、SB2の掘り方によって切られているもので、炉址ということも明らかでない。

この竪穴住居址から出土した遺物は多く、SB2と重複するため明確にできないが、4隅の主柱穴からはそれぞれかなりの土器が発見されている。すなわち北西隅の柱穴では土師器台付甕(25)・土師器杯(27～28)、北東隅の柱穴から須恵器杯(39)・南東隅柱穴から土師器台付甕(9・19・21)、そして南西隅柱穴からは土師器台付甕(14)が出土した。



第4図　竪穴住居址(SB1・2)遺構図(1:100)

ＳＢ２　ＳＢ１の南西部を切って造られた6.2×6 0mのほゞ正方形の竪穴住居址で、北西隅で地山面から22cmの深さであるが、地山面が南にゆるく傾斜するため南壁部ではわずか３～４cmと浅くなる。南北軸はＳＢ１に比べて東に大きく振りＮ26°Ｅを示す。４辺をめぐる周溝は幅約20cm、深さ約10cmで、底面は南に向ってやゝ傾いている。南東隅近くには周溝に接して深さ44cmの楕円形や深さ25cmの方形の土坑が掘られており、貯蔵穴とも考えられ、土師器片が出土した。４隅の主柱穴は径40～60cmで床面から40～54cmの深さで掘られ、柱間は東西3.4m、南北3.1mである。焼土は東壁近くにわずかに認めるのみで、カマド址等の構造のわかるものではない。

出土した遺物は多く、明らかにこの住居址からのものとして、土師器壺（５～６）・土師器台付甕（11～13、15～16、22）・土師器高杯（31～32）・須恵器蓋（36～38）がある。

ＳＫ４　ＳＢ１の北壁に接して発見された2.4×1.1mのほゞ長方形の深さ24cmの土坑で竪穴住居址と同じ暗褐色土が堆積しており、ＳＢ１との先後関係は明らかにならなかった。出土遺物には土師器台付甕（７、20）・土師器杯（30）などがある。

ＳＫ５　ＳＫ４の北にある深さ約20cmの不整形な土坑で、切り合い関係は定かでないが、いくつかの土坑が重なって掘られたものである。遺物は細片が多く、実測できる遺物としては土師器台付甕片(24)程度である。

ＳＫ10　すでに削平されていた発掘区北半部においては、唯一の古墳時代後期の遺構であり、径 1.5m、深さ10～14cmの円形の土坑で、底部のみが残念していたものである。土坑内には、暗褐色土が堆積し、底部はわずか４cmほどの差であるが段状となる。土師器杯（29）が出土しているが、全体的に遺物は少なかった。

２．平安時代前期の遺構

掘立柱建物址ＳＢ７と土坑ＳＫ３・ＳＫ６・ＳＫ８～９があり、ＳＫ３・ＳＫ６・ＳＫ９は平面が方形状の土坑で、底部がほゞ平坦であり、周溝や柱穴が検出されないこの時期の竪穴住居址の可能性もある。

ＳＢ７　発掘区中央部西端に一部分が明らかになった。棟方向がＮ72°Ｗを示す、梁行２間の掘立柱建物址であるが、桁行は未掘のため不明である。柱掘り方は平面が長径60～90cmの楕円形に近いもので、検出した地山面から30～50cmの深さで掘られている。柱間は桁行が 2.1m、七尺であるが、梁行は 1.9mとわずかに短くなっている。

ＳＫ３　ＳＢ７の東にあり、平面が方形に近い、深さ15cmの土坑で、長さ 4.8mを測る西壁以外は古墳時代後期竪穴住居址ＳＢ２と重複しているため明らかでない。出土した遺物には土師器杯（45）があるが、出土量は少ない。

ＳＫ６　発掘区の南端近くのゆるやかな斜面から検出された3.5×3.7mの平面が方形の土坑である。土坑の深さは北壁部では30cmであるが、南壁ではわずかに４～５cmと浅い。底面は平坦で、出土した遺物はほとんどなく、付近では土師器杯（44）が発見されている。

ＳＫ８　いくつかのピットが集中する発掘区中央部西端寄りにあり、不整形な平面を呈する土坑で、深さは20cm前後である。土師器甕（54）や細片が出土した。

ＳＫ９　ＳＫ８の西に接して確認された遺構で、大半は未掘部分に含まれ、また北辺部はすでに削平されてしまっているため、形態や規模ははっきりしないが、東壁の掘り方からみて、ＳＫ３及びＳＫ６同様、平面が方形に近いものでないかと考えられ、深さ約20cmの底面も平坦である。

この土坑から出土した遺物は多く、この時期の遺物として図示したものの大半が出土している。すなわち土師器杯（40～43、46～47）、土師器皿（48～50）、土師器鉢（51）、土師器甕（56）などである。

なお、発掘区以外にも配管工事の際の現地立会いなどにより第２図×印の箇所から土師器台付甕（18）などが出土し、また市道沿いにも遺物包含層が確認されており、それぞれ遺構の存在が予想されるところである。

Ⅳ．遺　　物

遺物は土器類と土錘に限られ、配管工事の現地立会の際にも若干出土したが、大半は竪穴住居址や土坑がある発掘区中央部から発見されたものである。その量はパン箱大の土器整理箱にして約30箱に及ぶ。時代的には検出された遺構の２時期すなわち古墳時代後期及び平安時代前期の他に、古墳時代前期に位置づけられる土器もわずかながら認められた。

１、古墳時代前期の土器

器種としては土師器壺・台付甕・高杯があるが、いずれも破片であり、その量はきわめて少ない。

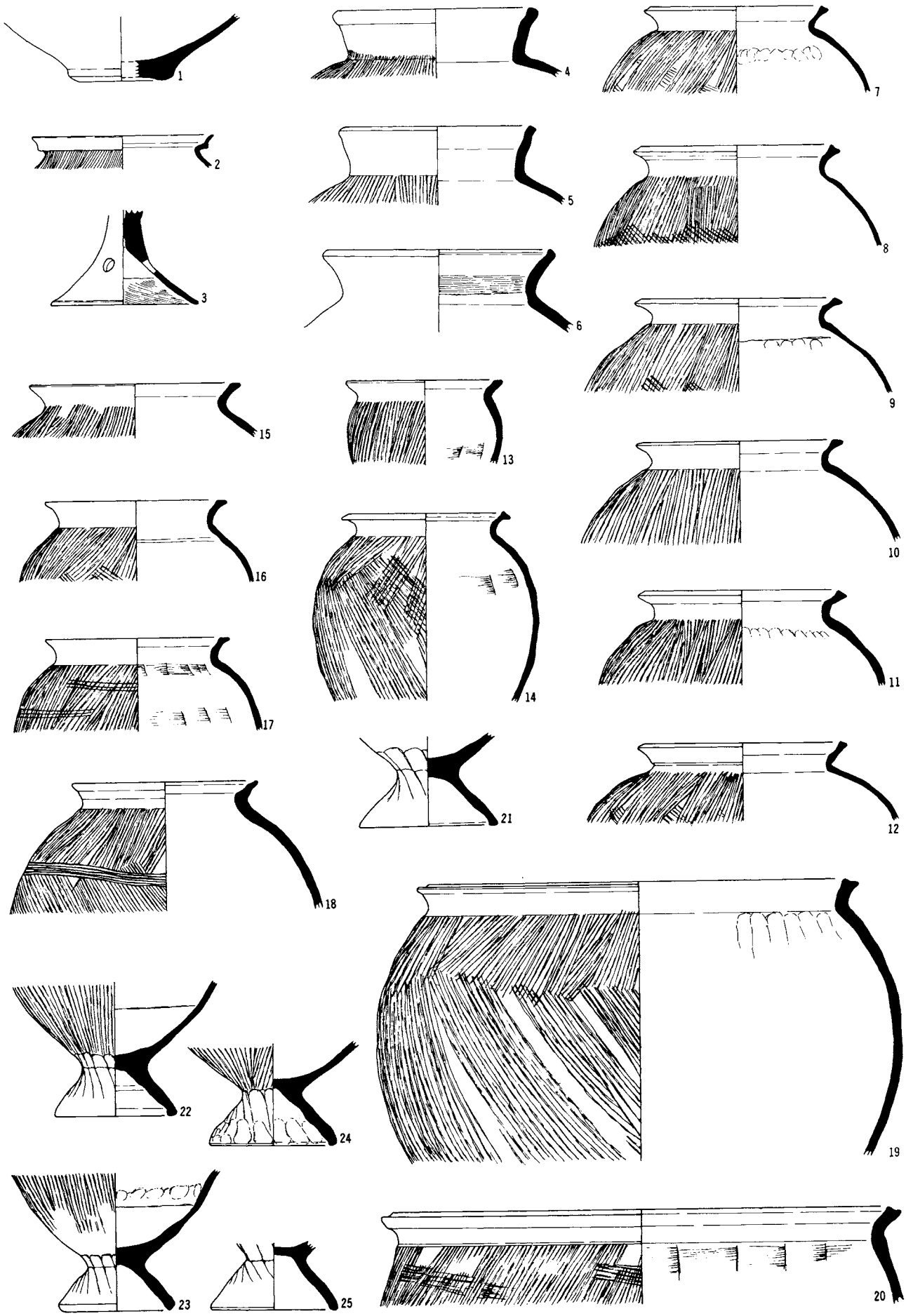
土師器壺（１）　球形の体部をもつと考えられる厚手の底部破片で、体部下半に縦方向のヘラみがきがなされ、内面はなでにより調整されている。

土師器台付甕（２）　口縁部が薄手で、断面が「Ｓ」字状に屈曲する甕で、体部には細かい斜方向のハケ目が施される。

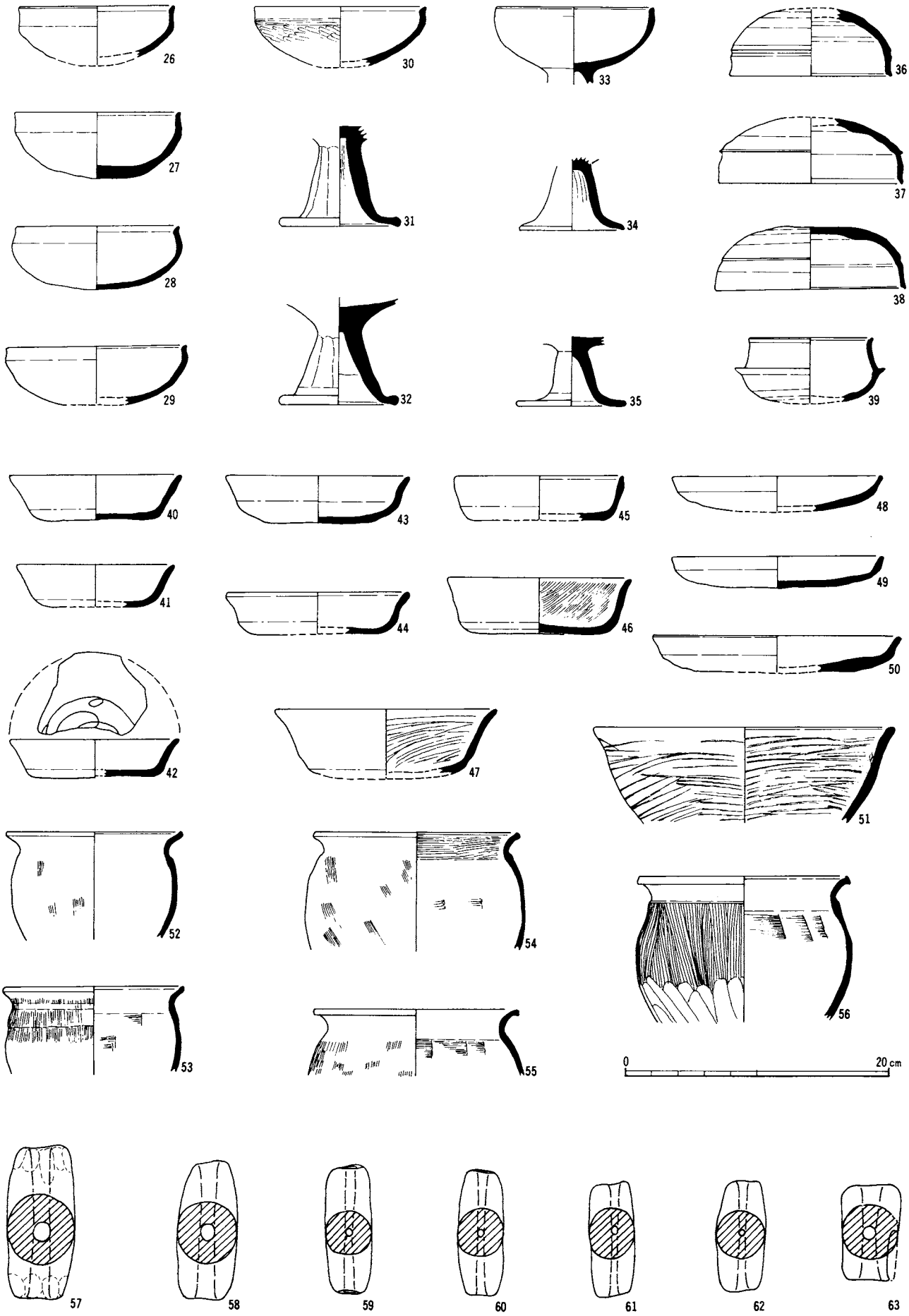
土師器高杯（３）　裾部が大きくひろがる脚部の破片で、外表には細かいヘラみがきが施され、裾部内面には横方向のハケ目がみられる。

２、古墳時代後期の土器

出土遺物の大半がこの時期に属するもので、土師器壺・台付甕・杯と須恵器杯・蓋がある。しかし須恵器は数少ない。



第5図　遺物実測図（1：4）


26
30
33
36
27
31
34
37
28
38
29
32
35
39
40
43
45
48
41
44
46
49
50
42
47
51
52
54
56
53
55
0
20 cm
57
58
59
60
61
62
63

土師器壺（４～６）　いずれも口縁部の破片であり、さほど外反しない厚手の口縁部と肩の張る体部からなる。口縁部の外反度やその他調整手法によって、２種類に分類できる。

４～５は口縁部がやゝ立ちあがるもので、口縁部の内外面は横なでされ、体部外表には粗いハケ目がある。

６は口縁部がやゝ外反し、口頸部内面は横方向のハケ目調整がなされ、口縁端部は上方につまみ出され、横なでされる。体部は４～５のようなハケ目は施されない。

土師器台付甕（７～25）　内外面ともに横なでされた短い口縁部が、わずかにＳ字状口縁の面影をとどめ、体部には粗いハケ目が羽状に施され、低く断面が八の字に開く小さな台が付く。詳細には口縁端部の形態や全体の大きさに各種のものがある。７～12・４は口縁端部が肥厚し、断面三角形を呈し、端部外面に稜をつくる。13、15～17は口縁端部が平坦面になるものであり、13は特に小型である。また17は体部肩部に横方向のハケ目をもつ。18も体部肩部に雑な横方向のハケ目があるが、口縁部は屈曲し、Ｓ字状口縁の感が強く、口縁端部は薄く丸く仕上げられる。19～20は体部のハケや口縁部の形態は他のものと同様であるが、特に大きな甕で、19の体部は丸味をもつが、20はあまり肩が張らないものである。

すぼめられた体部下端に付けられた低く小さな台部（25～25）は、下端部に平坦面をもつものとやゝ尖っているもの（23）があり、いずれも雑なヘラ削りが、体部下半から台部上半部にかけて施され、ハケ目の認められるものはない。

体部内面の調整については、指頭のおさえ痕や横方向のヘラ削り痕の認められるものがあり、中には輪積みによってなされる成形の下半部とそれより上の接合部がよくわかるもの（22～23）もある。

土師器杯（26～30）　径12cm前後、高さ4.5cm前後のもので、口縁部は内外面とも横なでされ、断面はやゝ内弯し、端部は内傾し、面をつくる。底部はやゝ丸みをもち、外表は27では一部に雑なヘラ削り、また30では細かいヘラみがきが認められるが、全体的に指頭によるおさえの凹凸がよく残っている。内面はていねいになで調整されており、27はいぶされたような黒色を呈している。胎土には砂粒を含み、焼成はおおむね良好であるが風化の激しいものもある。

土師器高杯（31～35）　杯部と脚部の破片で、完形品はない。33は杯部について完形で、形態・調整などは杯とほゞ同様である。脚部はやゝ外膨らみの筒部に屈折してひろがる裾部が続くもので、31～32は面取り風のヘラ削りがなされており、31・34には内面に粘土のしぼり痕が残る。いずれも赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含んでいる。

須恵器蓋（36～38）　口径12.3～14.4cm、高さ５cm前後。天井部は平坦で、口縁部はほゞ垂直に立つもの（36～37）とやゝ内傾するもの（38）とがある。口縁端部は内側に段をなし、天井部と口縁部の境は稜がみられるが、36・38は弱いものである。天井部はいずれもヘラ削り調整されている。

須恵器杯（39）　口径9.5cm、高さ（推定）5.0cmの小ぶりの杯で、口縁部の立ちあがりは長くやゝ内傾して、端部は内面に段をつくる。底部はヘラ削り調整がなされているが、焼成の際、自然釉がかかり黒灰色を呈している。

3、平安時代前期の土器

古墳時代後期のものに比べ、量的には数少ないが、土師器杯・皿・鉢・甕などがあり、そのほとんどがＳＫ９から出土した。

土師器杯（40～47）　小ぶりで浅いものとやゝ大きく深いもの（46～47）とがあり、口縁部は中ほどでわずかに折れ、端部が外反するが、まっすぐのび丸く仕上げられるもの（45）もある。口縁部外表及び内面はていねいに横なでされるが、底部は不調整で指頭のおさえが目立つが、器内面に暗文をもつ42・・46・47は一部にヘラ削り調整がなされる。

土器器皿（48～50）　口径16～19cm、高さ３cm未満で、口縁部は短く、中ほどでわずかに屈折し、端部は丸く仕上げられる。口縁部及び内面は横なでされるが、底部は不調整で指のおさえによる凹凸が激しい。胎土には砂粒を多く含み、風化が著しい。

土師器鉢（51）　赤褐色を呈する硬質な土器で、胎土は緻密なものである。口縁部の1/4程度しか残存していないが、口径約23cmのものと推定され、内外面にヘラみがきがなされる。

土師器甕（52～56）　口径が14～16cmの小型の甕で、外反する短い口縁部をもつ。口縁端部はわずかに、上方につまみあげられたものが多いが、内面に水平面をもつもの（55）やまた口縁部内面に横方向のハケ目のみられるもの（54）もある。体部は球形のもので、縦方向にハケ目が施されるが、風化が激しいためわずかにしか残っていないものもあり、56は体部下半にヘラ削りの認められる。

4、その他の遺物

土器以外の遺物としては、７個の土錘だけである。

土錘（57～63）　７個のうち６個は、ＳＢ２付近に設定された試掘坑の遺物包含層から出土したもので、他の１個も発掘調査の際、その周辺で発見されており、もともとまとまっていたのかもしれない。土錘は非常に大型で、最大のもの（57）は、径５cm、長さ11.5cmの円筒形で、径1.5の円孔をもつ。端部には手づくね痕をよく残している。他の58～62も細長くほゞ同様であり、最小の62でも径 3.5cm、長さ8.5cmもある。63はこれらとは若干異なり、径4.3cmに対し、長さ７cmしかなく短いものとなっている。

V. 結　　語

標高20cm前後の広大な高茶屋台地の端部にある大垣内遺跡は、道路崖面に露出する遺物包含層や配管工事の現地立会の際の土器の出土状況からかなりの広さをもった遺跡であることがわかり、箇所によってそれぞれ時期的あるいは性格的な差異が考えられ、未宅地化部分の遺跡の保護と調査研究が一層望まれるところである。

今回の調査は、合併処理槽建設予定地部分のみで、大垣内遺跡にとっては、ごく一部分であり、遺跡の全容は明らかにならないが、発掘調査の結果、最も出土量の多い古墳時代後期の土器について、簡単に問題を述べ結語といたしたい。

土器類のうち量的には土師器台付甕が多く、これはいわゆるＳ字状口縁台付甕の終末期とされる[(1)]もので、県内では亀山市地蔵僧遺跡[(2)]や鈴鹿市伊奈富遺跡[(3)]にその代表的な出土をみる。特に地蔵僧遺跡では、初期の須恵器を伴うとされる土器群を第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期の時期に細分しており、本遺跡の土師器はその第Ⅱ期に属し中には第Ⅲ期に近いものもみられる。そうしたことから６世紀前半に位置づけられるところであり、すでに５世紀末から、この地域においては久居古窯址群[(4)]およびその一群である津市半田藤谷古窯址群[(5)]で、伊勢地方最古の須恵器生産がなされている。しかし、本遺跡の須恵器は、陶邑古窯址群[(6)]で言うＴＫ47～ＭＴ15の時期にあたり、ＴＫ23と比定される久居古窯址群や藤谷古窯址群より遅れるものの、その出土はきわめて少ない。また土師器も古式の形態を継承しており、鈴鹿市郡山遺跡群の６世紀後半～７世紀前半に位置づく西高山Ａ遺跡では、出土土器のうち須恵器が90％に及ぶ[(7)]という現象を考え合せると、当初の須恵器の普及が一般的な集落に達するにはかなりの期間を要したのか、あるいは土師器・須恵器にはっきりとした機能の分化が考えられるのかは、わずかであるが本遺跡に須恵器を供給した久居古窯址群や藤谷古窯址群につづく古窯址の解明とともに、今後検討していく必要があろう。

註(1)　安達厚三、木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』60－２、1974

註(2)　倉田直純「地蔵僧遺跡発掘調査報告」亀山市教育委員会、1978。

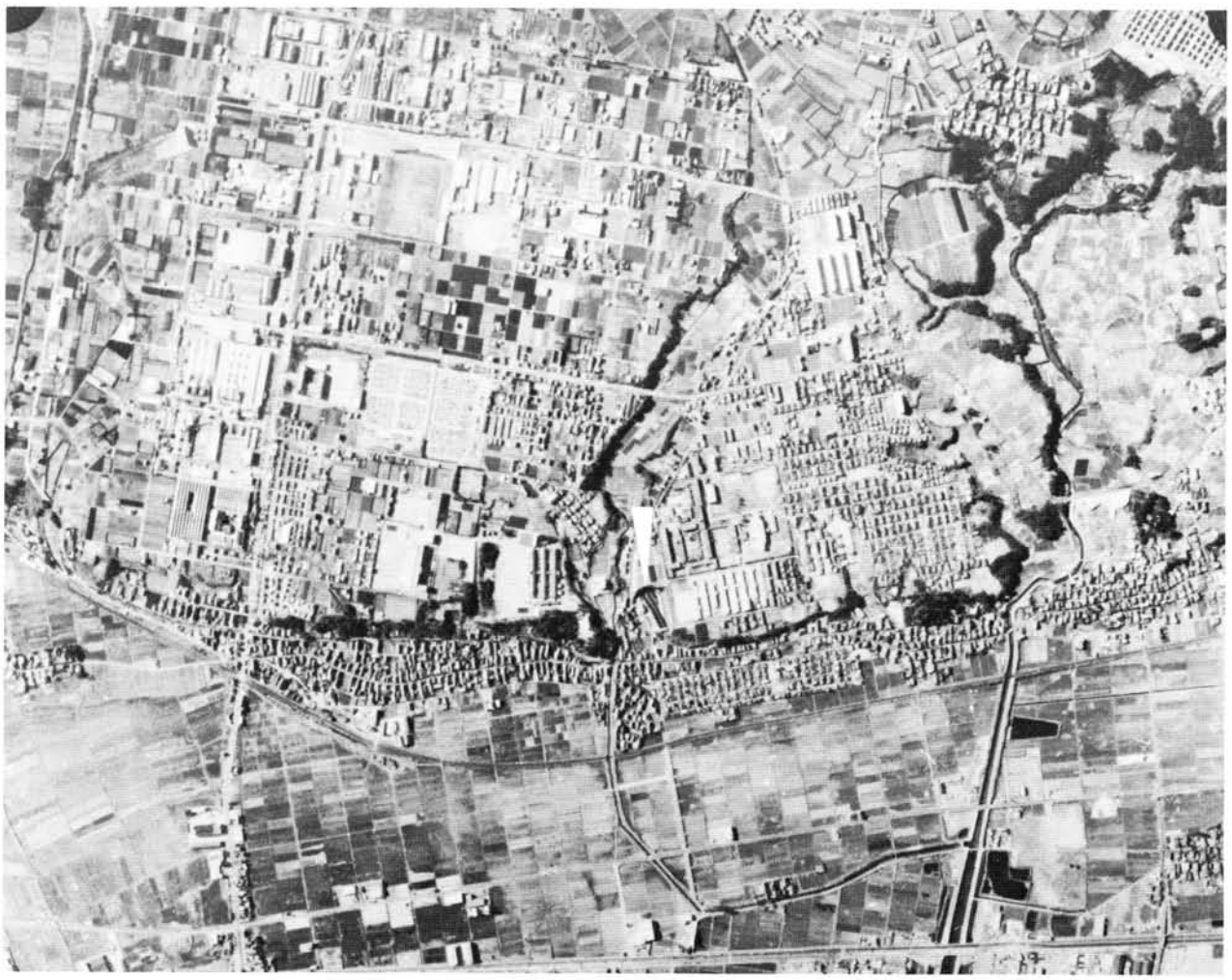
註(3)　小玉道明「伊奈富遺跡」『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』　1966

註(4)　小玉道明、山沢義貴「久居古窯址群発掘調査報告」久居古窯址群発掘調査団　1968

註(5)　三重県教育委員会「三重県埋蔵文化財年報告－昭和50年度」　1976

註(6)　田辺昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古学クラブ　1966

註(7)　中森成行「西高山Ａ・Ｂ遺跡調査概要」鈴鹿市遺跡調査会　1977



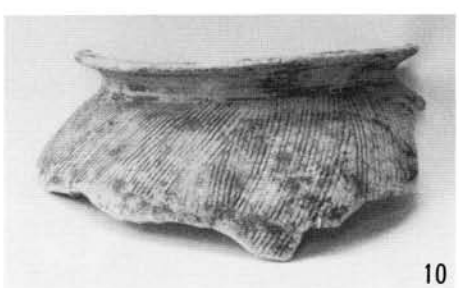
大垣内遺跡周辺航空写真（矢印）

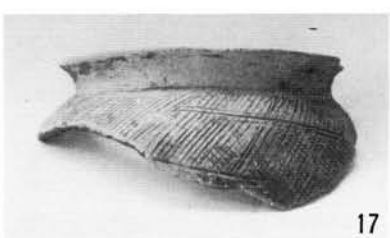
大垣内遺跡遠景（矢印）

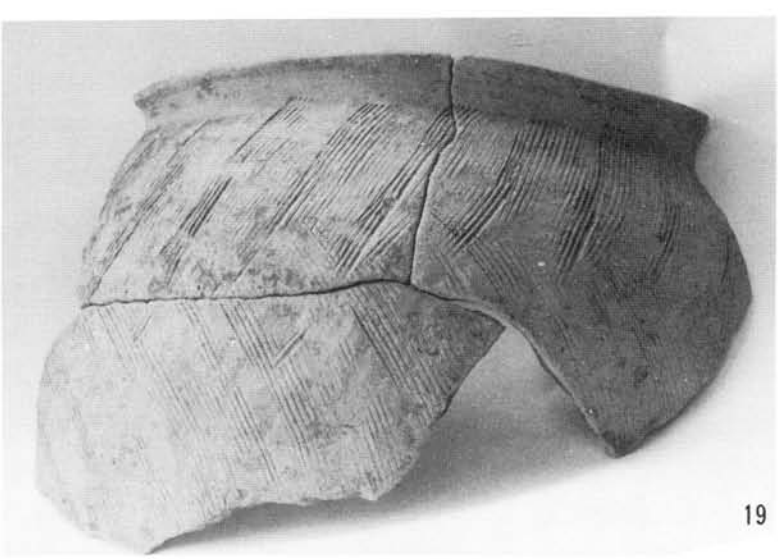
竪穴住居址（ＳＢ１・２）南から

竪穴住居址（ＳＢ１・２）南から

掘立柱建物址（ＳＢ７）と竪穴住居址（ＳＢ１・２）西から







出土遺物（１：３）

14

25

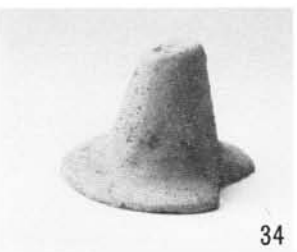
33

21

31

23

38

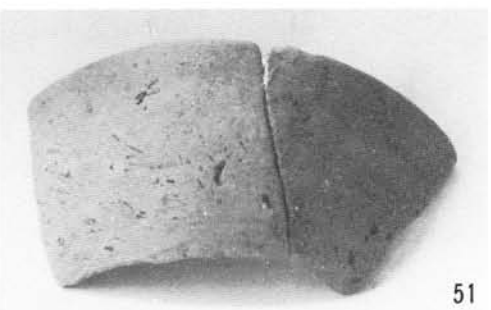

34

28

27

39

40


51

56

52

54

出土遺物（1：3）

昭和57(1982)年3月に刊行されたものをもとに
平成16(2004)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告53

大垣内遺跡発掘調査報告

1982年3月

編集発行　三重県教育委員会

印　刷　松阪市久保町1885番地の1
光出版印刷株式会社